

聖書：コリント人への手紙第二 6：3～13

説教題：自分を神のしもべとして推薦

日時：2024年12月15日（朝拝）

今、読んでいるコリント人への手紙第二はパウロが使徒である自分を弁護している書です。彼は個人的名誉のためにこのことをしているではありません。パウロが否定され、捨てられることは、パウロが語る福音が否定され、捨てられることにつながります。ですから彼はこの問題を放置できないのです。この手紙が宛てられたコリント教会にはパウロを批判し、見下す偽教師たちが入り込んでいました。彼らは自分たちの外見的な華やかさや肩書き、雄弁な話しぶりなどを誇る人たちでした。そういう観点から苦難の中で福音を伝えるパウロを見下していました。なぜ神に立てられた器があんな苦しい状態、弱い状態にあるのか。あれは神の祝福がないしるしだ。それに比べて我々はこんなにも豊かな神の祝福を受けていると自らの繁栄ぶりや外面的成功を誇っていました。そしてその主張にコリント教会は影響を受けていました。そんな教会に真の使徒はどういうものであるのか、使徒論を述べているのがこの手紙です。今日の箇所はその最たる部分と言えます。

パウロは3節で「私たちは、この務めがそしられないように」と言います。「この務め」とは前回の箇所に出て来たことを受けたものです。5章18節に「これらのことはすべて、神から出ています。神は、キリストによって私たちをご自分と和解させ、また、和解の務めを私たちに与えてくださいました」とありました。神が御子を通して私たちと和解してくださったという福音を宣べ伝える務めです。この尊い務めを受けた者として、自分はどのように歩んでいるかを彼はここで証ししています。二つのことが述べられます。

まずは「どんなことにおいても決してつまずきを与えず」ということです。人々がこの福音を聞き、信じようとする際に、自分がその妨げにならないようにすることです。この問題を考える際、まず福音そのものにつまずきがあることも頭に入れておくべきかと思います。そのつまずきとは特に十字架のことです。パウロは先の第一の手紙1章23節で「しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えます。ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとっては愚かなことですが」と述べていますように、十字架のメッセージは生まれながらの人間にそう簡単に受け入れられるもので

はありません。なぜあの呪いの木にかけられた人が私の救い主なのか。もっと輝かしい方を信じ、そういう方について行くというなら話は分かるが、あのような呪われた者が私の救い主であるとは到底思えないと。ここにつまずきがあるわけです。そしてこれと結び付いているのは私たちが罪人であるという真理です。教会に行くと、あなたは罪人だよというメッセージを聞かされるのが嫌である。そう言われなければ教会に行っても良いのだけれども、・・・と。ここにもつまずきがあるわけです。しかしこれらは妨げになるからと言って取り除けないものです。これらの要素を取り除いたら、それはもう福音ではありません。これを語らないところにはキリスト教も教会もありません。私たちは十字架こそを誇りとし、このメッセージを大胆に語らなければなりません。しかしこのような福音のエッセンスではないことについては人々のつまずきにならないように自分の生活を整えるべきことが聖書で言われています。たとえばパウロはIコリント8章13節で「ですから、食物が私の兄弟をつまずかせるのなら、兄弟をつまずかせないために、私は今後、決して肉を食べません」と言っています。この御言葉を詳しく説明する時間はありませんが、もし自分が肉を食べることで、それを見る人がつまずくなら、パウロは今後一切肉を食べないと言います。自分が肉を食べないことによって相手の人が救われるなら、喜んで自分の権利を放棄すると。また同じIコリント9章12節では、福音の働き人は福音の働きから生活の支えを得るのは神の定めによる正当なことだが、もしそれで人々がつまずくなら私はその権利を放棄すると言っています。実際パウロはこの問題で色々なことを言うコリント教会からは報酬を受け取りませんでした。それは現実には恐ろしいことを意味します。しかし彼は福音のためには喜んで自分の権利を後回しにしました。それはそれだけ福音が人々に受け取られ、救いがもたらされることの方がはるかに価値の高いことであると彼が考えていたからです。

そしてもう一つ彼が意識していたことは、4節にあるように「あらゆることにおいて、自分を神のしもべとして推薦」することです。表面的に読むと、自分で自分を推薦するとは何事ぞと思いかもしれませんが、これは自分の名誉のためではありません。これは言い換えれば、自分の生活をもって、自分が神のしもべであることを証しするということです。言葉だけではなく自分の生き方をもって福音を伝えることです。ともすると私たちは周りの人々に、私を見ないで神を見て！と言いやすいかもしれません。不完全な私を見てつまずかず、完全な救い主イエス様を見て！と。確かに大事なものは人に寄りかかるのではなく、神に寄りかかることです。第一の目は神に向けら

れるべきです。しかし同時にその神を信じる私たちがどのように生きているかは神を伝えるための重要な手段です。ですから私たちは安易に、私を見ないでキリストを見て！と言ってはならないのです。自分の生き方を通して福音の真実さを証しするように、私たち一人一人が自分を神のしもべとして推薦する生き方を祈り求めて行くべきなのです。

以下、パウロがどのように自らを神のしもべとして推薦しているかが述べられます。まず原文で最初に出て来るのは、新改訳で5節の最後に記されている「大いなる忍耐を働かせて」という言葉です。これがその後に出て来る9つの言葉にかかる形になっています。日本語訳では、日本語の性質のためか、9つの言葉が先に記され、それらを全部受ける形で5節の最後に「大いなる忍耐を働かせて」と訳されますが、原文ではこれが最初にあります。これによってはっきりすることはそこに重点があるということです。つまり福音を伝える神のしもべとして自らを示す生き方においてまず必要なことは忍耐である。しかも「大いなる忍耐」です。ちょっとやそっとの忍耐では務まりません。粘り強さが必要です。なぜならこれまでも見て来ましたように、キリストに従う者には「キリストの苦難」と呼ばれる道があるからです。私たちの救い主イエス様はまず苦難の道を進み、それから栄光へと入られました。私たちは嫌なこと、疲れること、苦勞することは全部イエス様に負ってもらって、自分はただハッピーな道だけに行くということはできないのです。イエス様はもちろん私たちの重荷を負ってくださいましたが、イエス様は信じる私たちにもご自身とともに苦難を担う道を用意しておられます。ですから4節に「苦難にも苦悩にも困難にも」とあります。なおこの9つのリストは3×3の3つのグループに分けることができます。ですから最初のこの三つは一つのグループです。3つの表現で苦難の色々な面が示されています。次の三つはより具体的な苦難のリストです。「むち打ち」は後の11章23～25節に出て来ます。そこでは「ユダヤ人から四十に一つ足りないむちを受けたことが五度、ローマ人にむちで打たれたことが三度」などと出て来ます。また「入獄」も同じ個所に「牢に入れられたこともずっと多く」と記されますし、使徒の働きにその実例が多く記されています。「騒乱」も使徒の働きにたくさん出て来ます。次の三つは色々な状況を指す言葉です。「疲れ果てた時」とあるように、パウロにもそのような日々がありました。「眠れない時」は、おそらく日夜働いたために、眠りにつくことができないことがたびたびあったということなのでしょう。また「食べられない時」もありました。働きに優先して身をささげたためでしょう。このようなすべてにおいてパウロは大い

なる忍耐をもって耐え忍びました。

次は福音を伝える者の品性に関わるものです。「純潔」は誠実であること。「知識」は神と交わり、神を知る知識のこと。「寛容」はすぐ怒らないこと。中傷されたり、ののしられてものしり返さないこと。「親切」は逆に自分にひどく接する人にも優しく、相手の益のために行動すること。次に「聖霊」という言葉がいきなり出て来て多少驚きますが、その前後に出て来る「寛容」「親切」「愛」はみなガラテヤ書5章の御霊の実に出て来ることを思えば、このような品性を生み出してくださる聖霊のことを述べたものと思われます。そして御霊の第一の実としての「偽りのない愛」。さらに「真理のことば」は福音のこと。「神の力」は福音宣教に伴う神の力のこと。「左右の手にある義の武器」については何を指すか多くの注解者も明快な答えを出せないようです。「左右の手にある」とは準備万端の状態であることを示し、パウロがいつでも戦える状態にあったことを言っているのかもしれませんが。「義の武器」とは「義という武器」と考えれば、偽教師たちのずる賢い歩みとは対照的に、神の前に正しいとされることだけを行っていたことを指すのかもしれませんが。そして色んな状況があったことが8節です。「ほめられたりそしられたり、悪評を受けたり好評を博したり」。このような中で翻弄されることなく、パウロは自分を神のしもべとして推薦する歩みをしました。

そして8節後半～10節にかけては、「～のようでも、～であり」という言い方で7つのことが語られています。先に語られるのはこの世の人々から見た評価で、後に続くのは神の前にあるパウロの姿です。まず「私たちは人をだます者のように見えても」とあるのは、ある人たちからそう言われたということなのでしょう。8節で言われたようにパウロはそのようにそしられました。しかし現実の彼は神の前では「真実」でした。また「人に知られていない」とは使徒として認められていないということを目指しているのかもしれませんが。しかし実際は「よく知られて」いました。神に良く知られていた、あるいはある人々の間ではそのように認められていたということでしょうか。また「死にかけているようでも、見よ、生きており、懲らしめられているようでも、殺されておらず」とあります。この手紙の1章8～10節で見た通り、もはや生きる望みが失われたような状態にパウロは至りましたが、そこからも助け出されました。また「悲しんでいるようでも」とあるように、悲しむことが多い日々でした。彼はこの手紙の前に「涙の手紙」と呼ばれる手紙を書き送っていました。しかしその心には

「いつも喜んでおり」という喜びがより深く支配していました。また「貧しいようでも」とある通り彼は貧しい中でも生活しましたが、「多くの人を富ませ」る働きをしました。これは靈的にということでしょう。そして最後に「何も持っていない」と世からは見られる者でしたが、キリストにある者として「すべてのものを持っている」と言っています。ローマ人への手紙 8 章 32 節の「私たちすべてのために、ご自分の御子さえも惜しむことなく死に渡された神が、どうして、御子とともにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがあるのでしょうか」という御言葉を思い起こせば、確かにそうだと言えます。

このように述べた上でパウロは 11 節以降でコリント人たちに愛の訴えをします。私たちはここまでパウロがいかにも多くの苦難の中で忍耐をもって自分を神のしもべとして差し出しながら奉仕して来たかを見て来ました。その中の一つを取り上げただけでも大変なことだと思わざるを得ません。なのにそういうリストが次々にあげられていました。後の 11 章 23 節以降ではさらに具体的な例が数多くあげられます。それを讀む私たちはただただ圧倒されるばかりです。そのような労苦に加えて、この 11～13 節にあるのは何でしょうか。それは自分を拒否した人々への愛のアピールです。偽教師たちと一緒にあって自分を否定し、自分を傷つけた人々たちに対してもパウロはへりくだり、愛をもって語りかけています。彼は言います。「コリントの人たち、私たちはあなたがたに対して率直に話しました。私たちの心は広く開かれています」と。これは確かに心を閉じている人の言葉ではありません。傷つけられたからと言って怒っている人はこうは言いません。あなたがたは私を侮辱したと言ってパウロは苛立っていません。彼は心を開いている者として率直に、自らの愛を表現しながら語り、彼らと和解し、ともに心を通わせて歩みたいという意志をはっきり示しています。13 節で「私は子どもたちに語るように言います。私たちと同じように、あなたがたも心を広くしてください」と言います。「子どもたちに語るように」というのはパウロが彼らの靈的な親だからです。そのような者としての愛情をもって語りかけ、あなたがたの方でも応えてほしいと言います。これは彼らがパウロを受け入れることによって、パウロが伝える福音をよりしっかり受け止め、その祝福に生きる者たちとなるためです。

以上の箇所を讀んで私たちはどういう思いを持つのでしょうか。自分にはとてもできないと思うのでしょうか。あるいはこれは使徒パウロの話であって自分には当てはまらない話として受け流そうとするのでしょうか。しかしそう簡単に言うことはできないと

思います。このパウロの生き方を見て思うことは、これはキリストの姿の写しそのものであるということです。ピリピ人への手紙 2 章 6～8 節が思い起こされます。キリストは神の御姿であられるのに、神としてのあり方を捨てられないとは考えないで、ご自分を空しくし、しもべの姿を取ってくださいました。ののしられてもののしり返さず、正しくさばかれる神にお任せして、誠実に歩まれました。そしてご自分を無にして、ついには十字架の死にまでも従われました。そのように私たちの救いのためにご自身を使い果たし、捧げ切ったキリストを見つめ、感謝する者として、パウロはその方に倣い、その方を映し出す歩みをしていたのです。私たちが信じる主とパウロが信じた主が同じなら、私たちの前にも彼と同じ歩みが開かれているはずではないでしょうか。

このクリスマスの時、このパウロの姿を通してイエス様がしてくださったことを思うことはふさわしいことと思います。イエス様は私たちの救いのために、私たちが愛して下ってくださり、ご自身の権利を主張なさらず、それを後回しにして、ご自身をささげてくださいました。パウロはパウロを拒絶していたコリント人たちになお心を開き、愛と忍耐をもって語りかけましたが、私たちも長らくイエス様を拒絶していた者たちであり、また信仰を持った後もちょっとした自分の都合でイエス様から顔をそむけるような者たちです。しかしそんな私たちにイエス様は心閉ざさず、むしろ心を開いて愛し、関わり続けてくださいましたし、今日もそうです。私たちもこのパウロの姿を通してイエス様がしてくださったことを思い、心からの感謝の礼拝をささげたいと思います。そして私たちもパウロに倣い、このイエス様を少しでも映し出す者でありますように。多少苦難があるからと言って、あるいは他の人から侮辱されるような扱いを受けたからと言って、それで忍耐できずにキレたり、怒る者でないように。他の人の信仰の成長のためなら喜んで自分の権利を後回しにする者でありますように。そこにイエス様が私のためにしてくださったことへの感謝とイエス様への愛を表す者でありますように。そうしてあらゆることにおいて自分を神のしもべとして推薦し、自らの生活を通してイエス様の救いの素晴らしさを証しし、すべてに勝って価値のある福音のため、主のため、御国のために自らをささげ、用いていただく光栄と特権に歩む者とされたく思います。